続報　獅子島架橋～実現に向けて～

6月23日に行われた、令和5年第2回鹿児島県議会定例会の一般質問で、地元選挙区の中村素子県議会議員が獅子島架橋や幣串～水俣航路の新造船について質問しました。

①獅子島視察の所感を問う

中村議員　獅子島は人口約600人の有人離島で農業と漁業が主産業。白亜紀の化石が出土する学術的にも価値の高い島であり、離島でありながら、平成28年ごろから子どもの数も増えている。

　これまで、現職知事の獅子島訪問は極端に少なく、今回の塩田知事の訪問は16年ぶりとなり、その訪問を評価したい。そこで、初めて獅子島を視察した所感を伺いたい。

塩田康一知事　視察の際には、島民に温かく受け入れてもらい改めて感謝申し上げる。

　基幹産業であるブリ・タイの養殖場や獅子島架橋の想定地、代替船建造を検討している獅子島汽船の船舶などを視察し、養殖業への飼料高騰の影響や老朽化した船舶の状況を見聞きした。いずれも島民にとっては、重要な課題であり、その対策をしっかり検討していく必要性を実感した。

　島民との意見交換会では、養殖飼料の高騰や代替船建造の課題のほか、獅子島架橋への強い思いを聞き、医療や教育に係る交通手段や住宅確保の難しさなど地域の実情について伺った。今後も島民の意見を伺い、長島町とも連携して獅子島の振興に努めていく。

②獅子島架橋構想実現の決意を改めて問う

中村議員　町が掲げる整備計画案では、すでに長島本島と橋でつながっている伊唐島から獅子島までのおよそ2・3キロメートルの橋梁を架けることとし、試算では403億円の事業費を見込んでいる。町では、国の事業活用を前提に、地元負担を30億円と算出し、基金としてすでに18億円を積み立てている。町の規模から考えてこれだけの基金の造成は容易ではなく、町が構想で終わらせない本気度を示すものである。県にはこの姿勢を重く受け止めていただきたい。現在全国で、本土架橋が可能となる離島は、実質的には4カ所。その中で、基金まで造成して準備を進めているのは、長島町のみ。県は、多額の事業費の面からハードルが高いとの見解を示しているが、架橋は事業費以上の事業効果を見込める。これはすでに長島町にある2つの橋が示している。架橋後の農水産業の生産額は、黒之瀬戸大橋架橋後の約50年で9倍、伊唐大橋架橋後の25年で2倍と生産額が向上しており、これぞまさに知事が言う「稼ぐ力の向上」ではないか。この経済効果に加え、橋梁には、島民の安心安全な暮らしを担保する大きな役割がある。

　また、島民との意見交換会の中で「緊急時のためにも観光のためにも橋が必要」との熱いメッセージは、知事の胸に深く刺さったと考える。

　そこで獅子島架橋構想実現に向けた知事の決意を改めて伺いたい。

塩田知事　実際に伊唐島や獅子島の海上、七郎山から計画案の場所を視察し、島民の意見を伺う中で、これが実現すれば産業や医療、教育など各面での重要性は非常に大きく、地域にとっていかに重要なのかを感じた。架橋の実現には多額の事業費などの課題もあるが、地元の熱意を改めて受け止め、町とも連携しながら引き続き国へ働きかけていきたい。

③新造船について県の見解を示していただきたい

中村議員　県の補助航路である獅子島汽船が島民の足として1日3往復運航しているが、使用船舶「ししじま」は建造から36年を迎え老朽化が進んでいる。視察後改めて新造船について県の見解を示していただきたい。

塩田知事　今年2月から4月にかけて町や獅子島汽船、地元住民、県などによる検討委員会を開催し、代替船建造の必要性について、関係者で認識を共有した。今後、獅子島汽船において具体的な仕様や建造費の検討を行い、令和7年4月の新船就航を目指していくことを聞いている。県としては、毎年の運航費補助などを通じて支援し、航路維持に向けて引き続き関係者と一丸となって取り組む。